

目次：

- p.02 展示概要
- p.03 会場について
- p.06 フロアマップ 1F
- p.07 フロアマップ 2F
- p.08 開場準備
- p.11 開場中オペレーション
- p.12 スタッフ配置
- p.14 閉場手順
- p.15 緊急連絡先
- p.16 展示作品概要
- p.26 KG+ Link tree

展示概要：

KG+から KYOTOGRAPHIE へ 可能性と飛躍のアワード

KG+SELECT は KG+のアワード部門として
2019年に始まった公募型のコンペティションです。

世界中から集まったエントリーの中から、審査員
の選考により選ばれた 10 名のアーティストが、
条件を揃えた会場を与えられ、製作費の支援を受
け、1 ヶ月にわたり展覧会を開催します。

国際的に活躍する審査員が実際の展覧会を審査し、
グランプリを選出します。

グランプリに選出されたアーティストは、奨励金
を受け、翌年の KYOTOGRAPHIE にて展覧会を
開催します。

さまざまな媒体やメディアからも注目される KG
+SELECT は、KYOTOGRAPHIE のステップアッ
プを経て、さらなる飛躍を可能にする展示型アワ
ードです。

会場：堀川御池ギャラリー

〒604-0052

京都市中京区油小路通御池押油小路町 238-1

開館時間：毎週 火曜日～日曜日 11:00 ～ 18:30

(18:00 最終入場 / 19:00 完全退館)

休館日：毎週 月曜日 (4/14, 4/21, 4/28, 5/5)

アクセス：

・京都市営地下鉄「東西線」二条城前駅
2番出口より徒歩2分

・京都市バス15番「立命館大前行」堀川御池
徒歩2分



PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基
VL: 藤本 隆行
SUB: 林田 天志

目次▲

会場・駐輪場入口：

一般客とスタッフ用出入り口の区別はありません。
自転車（バイク）で来られた方は、入って左少し
奥の Staff office 内 VL/SUB にその旨を伝えます。



自転車（バイク）で来られた方は、VL/SUB に言っ
て下記地図赤丸の駐輪場の門を開けてもらいます。



PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基
VL: 藤本 隆行
SUB: 林田 天志

目次▲

駐輪場：

前ページ地図上赤丸の門から入り、指定区画へ駐輪します。本駐輪場はスタッフのみ利用可能です。当施設には、一般訪問者用の駐輪場はありません。退勤時も事務局にお声がけして、扉のサムターンを回して出庫します。

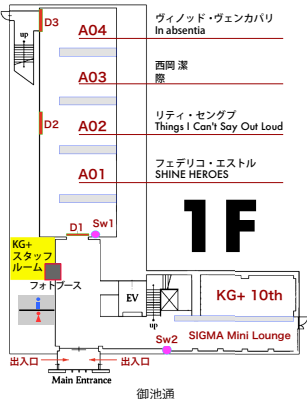
錠はオートロックですので、扉を閉めれば施錠されます。

出入口扉
サムターン



駐輪スペース

フロアマップ: 1 階



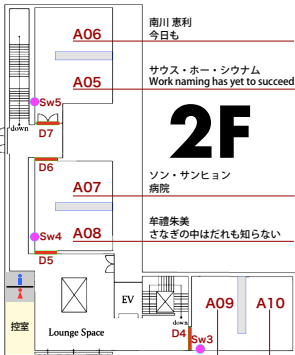
PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基

VL: 藤本 隆行

SUB: 林田 天志

目次▲

フロアマップ: 2 階



時津 剛
BEHIND THE BLUE

奥田 正治
Dig A Hole

PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基

VL: 藤本 隆行

SUB: 林田 天志

目次▲

開場準備:

フロアマップを参照して準備をします。

基本的に VL もしくは SUB が担当。

- ・ **D2**(ドア2) 以外の **D1** と **D3 - D7** の扉を全て開けます。(鍵がかかっていたら事務局へ伝える)
- ・ タイトル壁面用照明のコンセントを挿して点灯
- ・ **Sw1 ~ Sw5** の照明●5箇所を ON にします。

Sw1:

1階 A01-04



Sw2:

SIGMA Mini Lounge

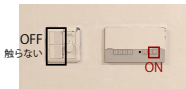


基本的に調光は終わっているので、ON するのみです。
LED が緑→赤に変わります。
もし調光が必要な際は、上蓋を開けてロケーションを確認しながら、対象箇所の
▲▼ボタン長押しで調光
します。



Sw3:

2 階 A05-06



Sw4:

2 階 A07-08



Sw5:

2 階 A09-10



展示スペース:

A03 西岡 - プロジェクター2台 ON

A06 南川 - 床に伸びているロール紙を整える

*A05 サウス・ホー・シウナム -

展示壁左の日めくり状の作品は触って OK

SIGMA Mini Lounge

*製品と会社 web への QR コード表示あり

開場準備: 10:30 基本的に VL/SUB が行います

ケース照明とモニタのコンセントを挿して点灯
モニタのリモコンは、配布物近くに有ります
ブラインドカーテン全てを開ける
配布物と水を追加 (段ボールから取り出す)
SIGMA の展示什器類のほこりや汚れを拭く
KG+10th の PJ と SP を ON

閉場手順: 閉場時 18:30 (最終入館 18 時)

ケース照明とモニタのコンセントを抜く
ブラインドカーテン閉める
配布物で少なくなっているものあれば補充
SIGMA の展示什器類のほこりや汚れを拭く
KG+10th の PJ と SP を OFF

ケース照明・モニタ コンセント位置



PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基
VL: 藤本 隆行
SUB: 林田 天志

目次▲

開場中のオペレーション：

朝礼：毎朝 10 時 45 分から 1F KG+ 控え室にて。

物販：KG+ カatalogと KG+10 周年本を販売。

精算は現金のみ。VL/SUB が対応します。

離席時の配慮：必ず、VL/SUB に一声かけてから、
離席して下さい。

当日の配置：次ページの「配置場所 01-03」に
休憩を挟んで、一定時間毎に配置。
当日の予定は朝礼時にお知らせします。

撮影：SIGUMA のモニタと映像は動画撮影 NG。
それ以外の会場内写真・動画撮影共に OK。

注意点：分からないことがあれば、すぐに VL もし
くは SUB に相談して下さい。

貴重品：各自で管理し、盗難などに十分に注意。

飲食等：SIGUMA の水は OK、会場でお飲み頂けます。
SIGUMA の空きボトルは、専用のボックスへ捨てますが、
他のゴミは捨てられず、受け取りもできません。

会場内は飲食不可、禁煙、ガムや飴も厳禁。コンビニや
スタバコーヒーのような、蓋のできない物は持ち込み禁
止。ただしキャップのあるペットボトルは OK。

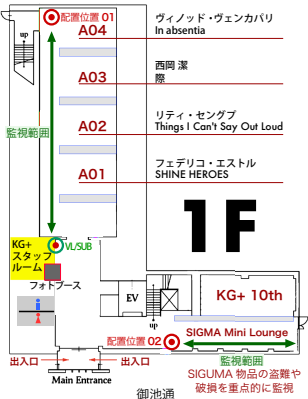
●スタッフの飲食は必ず控え室で、来場者から見えない
位置で行い、匂いが強い物は控えて下さい。

PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基

VL: 藤本 隆行

SUB: 林田 天志

スタッフ配置位置・監視範囲：1 階



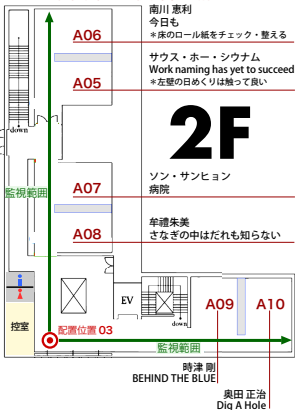
PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基

VL: 藤本 隆行

SUB: 林田 天志

目次▲

スタッフ配置位置・監視範囲：2 階



閉場手順：

フロアマップを参照して確認。

基本的には VL または SUB が行います。

戸締まり確認

D1 扉を閉める

D2 鍵がかかっているか確認（倉庫内消灯確認）

D3 扉を閉め、扉下の鍵 2 箇所を施錠

D4 扉を閉める

D5 扉を閉める

D6 扉を閉め、施錠

D7 扉を閉める

消灯確認

タイトル壁面コンセント抜く

Sw1 OFF

Sw2 OFF

Sw3 OFF

Sw4 OFF

2F スタッフ控え室確認

室内灯消灯

エアコン OFF

SIGMA Mini Lounge 閉場

PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基

VL: 藤本 隆行

SUB: 林田 天志

緊急連絡先：

PM: Philippe Bergonzo 090-4178-9725
フィリップ・ベルゴンゾ

中澤 有基 080-1428-3672
ナカザワ ユウキ

VL: 藤本 隆行 090-9114-3560
フジモトタカユキ

SUB: 林田 天志 080-2501-9041
ハヤシダ タカシ

KG+ 代表: 080-2055-3240

展示作品概要

1F-A01:

Federico Estol

フェデリコ・エストル

SHINE HEROES



ラバスやエル・アルト近郊には、毎日 3,000 人の靴磨き職人が客を求めて街に繰り出している。彼らの特徴づけているのは、周囲に気づかれないように付けているスキーマスクだ。近所では、彼らが靴磨きの仕事をしていることは誰も知らない。学校ではその事実を隠し、エル・アルトから街の中心部へ向かうときは、家族でさえ違う仕事をしていると信じている。マスクは彼らの最強のアイデンティティであり、彼らを見えなくすると同時に団結させる。この集団的な匿名性が、他の社会と対峙する際に彼らをより強くし、仕事によって被る排除に対する彼らの抵抗になっている。

私は 3 年間、靴磨き職人の新聞「Hormigón Armado」の関係者である 60 人の靴磨き職人とコラボレーションをしてきた。一連のワークショップで、私たちはエル・アルトのネオ・アンデス建築を背景に、グラフィック・ノベルのシーンを計画した。この過程で、シャイン・ヒーローたちは、社会的汚名に抗議するフォト・エッセイの制作者であると同時に主人公にもなった。今日、このグループは、靴磨き職人として働くよりも、このプロジェクトの写真集とポストカードの販売でより多くの収入を得ている。これは、差別を闘争と生存の物語に変えるフィクションの可能性を示しており、最終的には社会的統合を促進する一助となるだろう。

展示作品概要

1F-A02:

Riti Sengupta

リティ・セングプタ

Things I Can't Say Out Loud



8年という年月、実家から離れて暮らしていたリティ・セングプタは、パンデミックの始まりとともに両親と同居するようになった。帰国後、彼女は日々の暮らしを通して、家父長制の構造が家族に大きく作用している事実と直面した。

セングプタは、家庭内での母親が自身の立場を都合よく受け入れることを見直すために、彼女が「キッチン・カンバセーションズ」と呼ぶものを始めた。母親と一緒に家族のアーカイブを調べ、自分より先に生まれた女性たちの話に耳を傾けた。彼女たちが母親や妻になる前と後では、その生活は対照的であった。セングプタは、自分の母親が家庭の期待という重荷の下で、いかに人間性を削がれていったかを知ることができた。家父長制は日常の些細なしぐさの中に存在している——妻として、母として、娘として課される家事の負担や、無条件に与える者として美化した女性の役割——。母と娘の会話は、二人がそれぞれの現実を振り返る共同パフォーマンスとなる。浮き立つような言葉を使って、彼女らは家族、結婚、家庭という大きな政治の世界に反応する。

タンヴィ・ミシュラ、キュレーター/ライター

PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基

VL: 藤本 隆行

SUB: 林田 天志

目次▲

展示作品概要

1F-A03:

Kiyoshi Nishioka

西岡 潔

際



現代社会は、とめどない情報の波にさらされ、リアルとフェイク、フィクション、コントロールが入り混じった極端に曖昧な状態にある。西岡潔は、写真表現を通じてこのような現代の状況に対するアプローチを試みている。彼の作品は、リアリティとフィクション、フェイクの境界を行き来し、写真がもつリアリティが失われつつあるこの時代において、写真特有の制約から解放された新たな表現の可能性を追求している。この表現は、写真のリアリティの枠をにし、新しい視点を生み出している。

昨今、写真や映像を見る際にそれがAI技術による生成物かどうかを意識せざるを得ない状況にあり、西岡の作品はこうした現代の状況に対する一つのアプローチとして、写真のリアリティと絵画的なイメージを融合させている。その結果、単なる視覚的な美しさを超え、鑑賞者に「現実とは何か」「記録と創造の境界はどこにあるのか」という問いを投げかけている。

展示作品概要

1F-A04:

Vinod Venkapalli

ヴィノッド・ヴェンカバリ

In absentia



この土地で孤立した生きものたちに闇が広がっていく。彼らはもはや、陽の光の暖かさを思い出すことはないだろう。神々がこの地を見捨てたことで、悪意と憎悪は隅々まで満ちている。この世界には愛など存在しないのだ。卑劣な人間たちは、自分の人生を生きるためだけにもがき奮闘している。この土地は、自分たちの人生を生きようとする破壊的な者たちの戦場となるだけだ。裏切りや欺瞞は新たな常態となっている。いくつもの祈りが投げかけられてなお、天は沈黙したままだ。わずかな希望を求めて、生き物たちは名ばかりの神々に期待する。しかし、死はいたるところに潜み、次の獲物を辛抱強く待っている。

動物たちは拷問され、生け贄に捧げられる。罪のない生き物は、より良い未来というみせかけの目的のために虐げられ、ただ捨てられる。危害を加える者たちが、どうしてそう簡単に許されるのか。祈りは、そのために存在するのだろうか？このような重罪は、どうすれば清められるのだろうか？この果てしない夜はいつ終わるのだろうか。暗闇と恐れの旅の先に、どんな恐怖が待ち受けているのかは知る由もない。いつになったら私は再び光を感じることができるだろうか？私は疲れ果て、もうこれ以上耐えられない。

展示作品概要

2F-A05:

South HO Siu-Nam

何兆南 (サウス・ホー・シウナム)

**Work naming has yet
to succeed**



一年前に香港中に貼られたスローガンや言葉は、今や塗りつぶされたり消されたりしているが、なぜかそれらの言葉がぼんやりと薄く現れ始めた。

2019年の巨大な社会運動の後、香港がかつてもっていた言論の自由は消えてしまった。

視覚的には、それは消えたように見えるが、アーティストの目にはそれは消えていない。

ただ一時的に、微妙に隠されているだけだ。

2020年から2024年にかけて、都市の風景に隠された言葉を捉えることで、香港の民主主義と自由が厳しく抑圧されていること、そして市民たちが自由への希望を維持しようと奮闘していることを表現しようとしている。

展示作品概要

2F-A06:

Eri Minamikawa

南川恵利

今日も



結婚し、こどもが生まれた

毎日ほぼ同じ時間に、ほぼ同じことをする生活

同じことの繰り返し

生活の全てが家族のためにまわっていき

母親という役割をこなしていく

わたしがわたしでなくなっていくような錯覚

愛する家族のおかげで得る心の平穏と安定した生活

相反して増す退屈感と焦燥感

自分をたしかめるように客観的に機械的に写真を撮った

今日も、また

展示作品概要

2F-A07:

SangHyun Song

ソン・サンヒョン

病院



1945 年 2 月 16 日、27 歳の青年尹東柱（ユン・ドンジュ）は日本の福岡刑務所で命を落とした。死因は未だ不明であるが、共に収監された友人の証言などからさまざまな説が存在している。その後 3 年が経ち、彼の唯一の詩集『空と風と星と詩』が出版され、彼は愛する祖国で国民的詩人として記憶される存在となった。

尹東柱の慰霊碑が京都の同志社大学にあると知り、日本を訪れたソンは、ある日本人と出会う。その人物は尹東柱の詩と人生を通じて平和の価値を知り、日本の過去について考えるきっかけを得たと語る。その話を聞いたソンは、自分が彼を十分に理解していなかったことに気づき、彼の生き方を作品にすることを決意した。

尹東柱は詩集の題名を『病院』とすることを考えていた。詩を通じて人々が癒され、平和が訪れることを願ったためである。ソンは彼の視線を写真で残し、新たな「心の病院」を築くことを目指している。

展示作品概要

2F-A08:

Akemi Mure

牟禮朱美



さなぎの中はだれも知らない

一般的な「思春期」のイメージは、SNS などによって流布され肯定されている。その表現手法は、彼女らを扇動するときすらある。しかし、わたしは定型の形に違和感がある。言葉で表現すると修飾され、違った意味に変換されそうなので、口ごもりながらこの作品をつくった。

撮影中彼女らは制服を着て周囲に溶け込み、戸惑いながらわたしとある一定の距離を保ち続けた。制服はみる側に考えることを保留にさせ、彼女らの押し黙る表現を助ける。ぎこちない会話は続かず、ただ唯一、レンズがお互いの依り代だったように思う。

しだいにわたしは制服が未完成な彼女らを外圧から守るさなぎにみえてきた。SNS 時代の彼女らは、イメージが勝手に張り付くことを恐れている。彼女らは、外へは余白としてとりあえず固定したイメージを与えておきながら、安全なさなぎの中で移り変わっているのだとしたら、わたしは容易にメディアのイメージに答えを求めるのではなく、わからないまま観察すべきだと思った。そして彼女らが戸惑ったように、私たちも戸惑わなければならない。このような行き来するまなざしにこそ、「思春期」という名でカムフラージュされている彼女らの「本当の態度」が立ち表れてくるのだと思う。

展示作品概要

2F-A09:

Takeshi Tokitsu

時津 剛

BEHIND THE BLUE



都市開発に伴う地価高騰＝高級化によって街から包容力と多様性が失われる「ジェントリフィケーション」は成熟した大都市に共通する問題だが、東京も例外ではない。2000年代以降、建築基準を緩和して都市を再生させるという「都市再生特措法」をトリガーに、大規模な都市開発とタワーマンションの建設ラッシュが続き、その表層は大きく変貌し続けている。そして街を歩くとどうだろう。歩道橋やビルの隙間に設置されたフェンスや扉、横たわれないように肘掛けがついたベンチ、「排除アート」と呼ばれる奇妙なオブジェや突起物など、その「排他性」にも気づく。昨今、都心で路上生活者を見ることは少なくなったが、都市生活者でもあった彼らが身を潜め、体を横たえていた隙間は消えゆき、彼らは、ますます「見えない存在」へとなりつつあるようだ。

東京の周縁を流れる多摩川を歩いた。点在するブルーシートは、路上生活者の即席の住まいだ。バブル経済を懐かしむ者、故郷に思いをはせる者―。彼らは、モノを保護したり、隠したりするブルーシートによって皮肉にも可視化された「見えない存在」といえないだろうか。東京に移り住んで30年余り。かつての東京が内包していた雑多性という名のおおらかさを、最近懐かしく思う。このプロジェクトは都市の周縁から照射した、私なりの東京論でもある。

PM: フィリップ・ベルゴンゾ、中澤 有基

VL: 藤本 隆行

SUB: 林田 天志

目次▲

展示作品概要

2F-A10:

Masaharu Okuda

奥田正治

Dig A Hole



はじめは震災から 11 年たった福島から宮城の海岸線でみた風景から。

防潮堤、植樹された高台、ソーラーパネル、土砂置き場、雑草が生える更地を緑地公園にするためにダンプカーで岩や土が運ばれていく。新しい田んぼへの道がつくられ、人が住めないと定められた場所に、グランピングサイトが建設されている。パッキングされた廃棄物が埋め立てられ、大規模な丘が形成されている。除染は完了しているが、まだ作付けすることのできない畑をこの場所にとどまった農家が分担して管理維持している。700 年代の史跡が地中から掘り起こされ、考古学で扱うような時間軸で、高レベルの放射性廃棄物を地層処分するための研究が進められている。避難して戻らない友人の家の庭先に「殺風景だから」と植樹する人。大昔の人々が数キロメートル離れた川から岩を運び、並べて死者を吊ったとされる行為と重なる。合理、不合理ではない他者への行為が、人を人たらしめているように感じる。

復興したとされる場所を入りに、大規模につくられていく風景とその中で出会った人たちの営み、堆積物の長期的な時間軸と風景が変わる速度を「穴を掘る」という行為を通して見つめる。

KG+ Link Tree

